掲示板のことば

老・病・死
を見て
世の非常
を悟る
『仏説無量寿経』

２０２３．１２

この言葉は、私たち真宗門徒の正依（しょうえ）の経典、『仏説無量寿経』にある言葉です。

この言葉の背景には、お釈迦（しゃか）さまの出家の動機と言われている「四門出遊（しもんしゅつゆう）」の物語が伝えられています。お釈迦さまが若かった（子どもだった）ころ、東の門から出たところ老人に出会い、自分もやがて老いることを知り怖くなって逃げ帰ります。また、南の門から出て病人に出会い、自分もやがて病むことが怖くなり、西の門から出たら死人に出会い、自分もやがて死ぬことを知り怖くなってまた逃げ帰る。そして北の門から出たところ、道を求めて生きる沙門（しゃもん）に出会い、「私はこのように生きたい」と願われ、それが出家の動機となったと伝えられています。

この時、ブッダとなる前のお釈迦さま（ゴータマ・シッダールタ）は、人間はやがて老い、病を得ることもあり、そして必ずそのいのちを終えてゆくという事実を知ったのです。そして「常（つね）に非（あら）ず」、つまり、すべては移り変わってゆき、一瞬たりとも同じであることはない、ということを知ったのです。

私たちには、いつまでも今のままが続いて欲しいという執着の心があります。老病死（ろうびょうし）の事実を知りながらも、できるだけ日常からは遠ざけて、その事実を受け止めることを先送りにしているのではないでしょうか。

お釈迦さまは、そのいのちの最後に、年老いて、病を得て、そして死んでゆく姿を見せることで、その事実を身をもって教えられました。

私たちも、身近にいる大切な方から教えられているのではないでしょうか。

老病死のいのちの事実を生きて往くことを私は「仏教の終活」と言っています。

真宗大谷派　光明寺住職　小林尚樹